PA-8

VN スル構文の口語表現における格助詞省略*

杉村美奈
（立命館大学）

要旨

「勉強」などの動名詞（Verbal Noun: VN）は、動詞「スル」と結びつくことによって、通常は、「勉強する（VN スル）」、「勉強をする（VN をスル）」のどちらの形でも生起可能であり、ヲ格が随意的に現れる。一方、VN が内項を伴った場合には、「音楽を勉強する（VN スル）」、または、「音楽の勉強をする（VN をスル）」のいずれかの形となり、「VN をスル」形からヲ格を省略した「音楽の勉強する」は、口語体以外の文体では容認されない（Terada 1990; 岸本・于 2019）。

本研究では、口語表現としての VN スル構文に現れる VN を名詞化された動詞 （Kamiya 2005）と捉え、K(ase)を主要部とする KP（Travis & Lamontagne 1992; Fukuda 1993）構造をもつと仮定する。その上で、KP 構造をもつ「VN スル」は VN が「スル」と編入せず、K のヲ格が省略された場合に口語体として解釈されることを提案する。また、格省略と終助詞などの文末表現や他の談話的要因との関連性（Masunaga 1988）を探り、異なる文体における格省略の環境・条件についても考察する。

1. はじめに

「勉強」などの動名詞（Verbal Noun: VN）は、動詞「スル」と結びつくことによって、一部を除き（Miyagawa 1989; Terada 1990）通常は、「VN スル」（=1a）、「VN をスル」（=1b）のどちらの形でも生起できる。

(1) a.（大学で）音楽を勉強する。
　　b.（大学で）音楽の勉強をする。

VN は動詞・名詞の両方の側面を持つ（Kamiya 2005 他）ことから、原理上、VN およびその目的語の両方にヲ格が付与される（2a）の形や、VN 内部に目的語は留まり、VN 自体は「スル」への（統語・語彙的）編入・併合により動詞として振る舞う（2b）のような形が可能であることが予測される。

(2) a. ??（大学で）音楽を勉強をする。
　　b.*（大学で）音楽の勉強する。

しかし、実際には（2a）はかろうじて文法的であるとされ、文章語の（2b）は容認されない。ただし、（2b）は口語体としては許容される（Terada 1990; 岸本・于 2019）ことが（3a,b）からも確認できる。

(3) a.（君は／花子は）大学で何｛を／の｝勉強するの？
　　b.（私は／花子は）音楽｛を／の｝勉強するよ。

以下、本稿では、2 節で（1a）の「VN スル」、（1b）の「VN をスル」について、先行研究における分析を概観し、3 節で（2b）、（3b）の VN スル形が、K(ase)P（Travis & Lamontagne 1992; Fukuda 1993）として具現化した際には口語体として解釈され得ることを提案する。次に、3 節の提案を受け、「VN スル」と文体との関連性について 4 節で考察し、5 節で結論と今後の課題、研究の方向性について述べる。

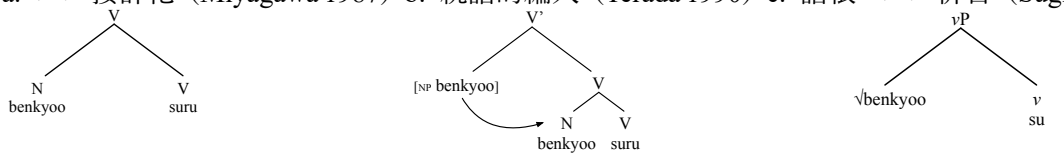
2. 格助詞省略としての VN スル

「VN スル」構文は、スル接辞化（Miyagawa 1987）、統語的編入（影山 1980; Terada 1990 他）、語根 VN

*本研究の遂行にあたり、貴重なコメント及びご指摘をくださった宮本陽一氏に深く感謝申し上げる。なお、本研究は JSPS 科研費（No.19K13188）の助成を受けている。

と「スル」との併合（Sugimura 2012; 長谷川・大関 2020; 長谷川 2021）などによって捉えられてきた。

(4)　a. スル接辞化（Miyagawa 1987）b. 統語的編入（Terada 1990）c. 語根・スル併合（Sugimura 2012）



一方、「VN をスル」構文は、「スル」が内項を含む VN を補部にとり、ヲ格が VN に現れるという分析（影山 1993）や、VN がスルに LF 編入する分析（Saito & Hoshi 2000）などによって捉えられてきた。

(5)　a. VN 補部分析（影山 1993）　　b. LF 編入分析（Saito & Hoshi 2000）

先行研究では、(2a,b) の文法性は以下のように説明されてきた。(2a) は VN とその項がヲ格を伴うことにより（表層的）二重ヲ格制約（Harada 1973 他）を違反していることから文法性が落ち（Sells 1988; Saito & Hoshi 2000 他）、(2b) は「VN スル」が一語として機能しているため、内項が語の内部にあることで語彙的緊密性を保持することができず非文法的となる（Kageyama 2009）。ただし、(2b) は、口語体としては容認され、この場合は、VN は「スル」への編入がされていないと分析される（Terada 1990）。

3. 提案

3.1. 「NP を VN スル」と「NP の VN スル」における構造の違いと文体

本研究では、格が機能範疇 K(ase)を主要部とする K(ase)P を形成し、KP は名詞句構造の最外層である（Travis & Lamontagne 1992; Fukuda 1993）と仮定する。また、動詞と名詞の二面性を見せる VN は、名詞化された動詞として捉える（Kamiya 2005; cf. Terada 1990）。その上で、(2b) の「VN スル」は VN が「スル」と編入せず、K(ase)P として具現化した際には口語体として解釈され得ることを提案する。

Kamiya（2005: 213）は、「VN をスル」構文においては、VN が空の名詞化辞（null nominalizer）である N に名詞化された動詞であると主張しており、(6a-c) の 3 つの名詞化の可能性を挙げている。

(6)　a. $[_{NP}\ [_{V}\ VN] + [_{N}\ \varnothing]]$
　　b. $[_{NP}\ [_{VP}\ [_{NP}\ N] + [_{V}\ VN]] + [_{N}\ \varnothing]]$
　　c. $[_{NP}\ [_{ASP}\ [_{vP}\ [_{VP}\ [_{NP}\ N] + [_{V}\ VN]] + [v]]\ [Asp]]\ [_{N}\ \varnothing]]$

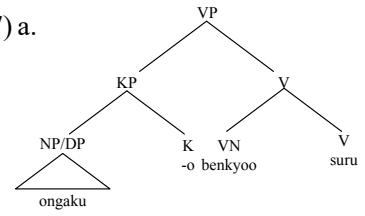
Kamiya は (6a-c) のどのタイプの派生を辿るかによって、VN の項の現れ方が決定されると主張している。(6a) は、項は現れないが修飾語句は現れ得る、「(大学受験の) 勉強」(Kamiya 2005: 214) のような形式、(6b) は内項が現れる「音楽の勉強」のような形式に対応し、「スル」とこれらの名詞句が組み合わされ、「VN をスル」が形成される。一方、(6c) は (2a) のような二重ヲ格の例に相当する。[1]

本研究では、(6a, b) タイプの VN の名詞化に注目し、VN スル構文における格省略を考察する。また、名詞化辞の役割を担うのは K 主要部とし、(1a) タイプの従来の「VN スル」に (7a) の構造を、(2b)

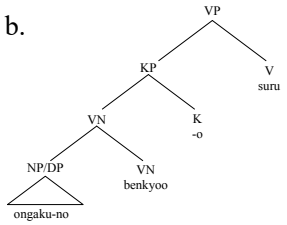
[1] (6c) の *v*P および Asp(ect)主要部は、ヲ格が名詞句内で付与されると言う主張と、形容詞ではなく、様態副詞やアスペクト副詞が VN を修飾できると言う事実に依拠している（例：「??英語を｛素早く／*素早い｝勉強をする」、「??英語を｛1 時間で／*1 時間での｝勉強をする」(Kamiya 2005: 212)）。

タイプの「VN スル」に（7b）の構造を仮定する。

(7) a.



b.



（7a）では、名詞句である「音楽」が KP を形成し、ヲ格が K 主要部に現れる。一方、VN である「勉強」と「スル」が一つの動詞を形成し（cf. Sugimura 2012; 長谷川 2021）、KP を項として取る。従って、（7a）では、VN は KP 内には生起せず、VN 自体のカテゴリーも動詞であるため格を持たない。一方、（7b）では、VN の内項である「音楽」が K により名詞化された VN 内に現れるためノ格を伴い、VN 全体が「音楽の勉強」となる。さらに、この VN が主要部 K と併合し、KP を形成した後に、KP 全体が「スル」と併合する。KP は「スル」からヲ格を付与されるため、K 主要部のヲ格省略が起こらない場合は（1a）の形となる。一方で、ヲが省略されると（2b）の形となり、この場合は口語体として解釈された場合にのみ文法的となる。つまり、K の範疇としての独立性（Travis & Lamontagne 1992）が文体における解釈の違いからも示唆されるというのが、本研究での提案である

なお、N ではなく、K を名詞化辞（nominalizer）とする根拠の 1 つとして、N 主要部をもつ VN（影山 1993 他）に格助詞が付加する事実がある（例：$[_{KP}[_{NP}[_{VN}[_{DP/NP}$ 音楽の $[_{VN}$ 勉強$]]$ $[_{N}$ 中$]]$ $[_{K}$ に$]]$）。

3.2. 合法的な格省略

（2b）の「VN スル」形が口語体のみに許されると言う事実に対する説明は、Horiuchi（2005）による格省略の条件に依拠している。

(8) 助詞の<u>合法的な</u>省略は、その助詞が下記のいずれの格も標示していない場合、そしてその場にのみ許される。
  a. 意味格（semantic case）
  b. 名詞格（nominal case）
  c. 動詞格（verbal case）　　（Horiuchi 2005: 144; 強調箇所は著者による）

Horiuchi は、「合法的に」格が省略されるためには、格助詞が、意味格（例：から、まで）、名詞格（ノなどの属格）、動詞格（ガ・ヲなどの主格・対格）、のいずれにも該当しない必要があるという条件を提示している。「合法的」な格省略を文章語における名詞句への適用と捉えると、（2b）のヲ格省略は（8c）に抵触し「合法的」ではないため、結果として、「VN スル」は口語体の解釈でのみ許されることになる。一方、（1a）の「VN スル」は（7a）の構造に対応し、VN 自体は動詞のため格を持たない。つまり、格省略によって「VN スル」が生じた訳ではないため、（8）の制約の適用外となり、文体の差が生じない。

では、なぜ（2b）の構造である（7b）において、VN と「スル」は一つの動詞を形成できないのであろうか。最終的に VN とスルが一つの動詞を形成することができれば、（1a）の「VN スル」と同等の文法性が（2b）に与えられるはずである。これは、主要部 K が VN と「スル」の間に介在することが「VN スル」が形成できない理由であると考えられる。つまり、K の介在によって、語彙範疇→機能範疇→語彙範疇への編入が妨げられ（Li 1990）、VN は「スル」への編入ができないことに起因すると言える。

4. 考察

4.1. VN スルと文体

3 節では、VN スルが格助詞の省略により口語体としてのみ解釈される事実が、VN が KP 構造をもつか否かに関連付けられることを提案した。つまり、同じ「VN スル」でも、（7a）の「VN スル」と（7b）の「VN スル」は容認される文体が異なる。まず、（9a）は、（7a）の「VN スル」に相当し、（9b）は（7b）

の「VN スル」に相当するが、どちらも口語体として容認される。

(9) a.（大学では、）音楽を勉強したの？
b.（大学では、）音楽の勉強したの？

一方、（10a）では、（7a）の「VN スル」が丁寧体として現れ、適格なのに対し、（7b）の「VN スル」が丁寧体となった（10b）は容認度が下がる（cf. Terada 1990: 144）。[2]

(10) a.（大学では、）音楽を勉強しましたか？
b. ??（大学では、）音楽の勉強しましたか？

さらに、内項を伴わない VN では、（11a）の口語体、（11b）の丁寧体、どちらの形も容認される。

(11) a.（大学では、ちゃんと）勉強したの？
b.（大学では、ちゃんと）勉強しましたか？

従って、VN 単体では KP 構造、動詞化された VN 構造のどちらでも具現化され得る（cf. Sugimura 2012）。

ここで、3 節で見た（8a-c）の格省略の条件に戻ると、これらの条件をすべて満たすためには、省略の対象となる助詞が「から、まで」などの意味格、名詞内に生じるノ、ガ、ヲなどの構造格のいずれにも該当しないことが求められることになる。そうすると、これらの条件をすべて満たすことは一見不可能であり、すべての格省略は口語体でのみ許されることが予測される。この点について、Horiuchi（2005）は、（8a-c）のいずれにも抵触しない唯一の環境が、（12a,b）のような「統語的複合語」（Shibatani & Kageyama 1988; 影山・柴谷 1989）の場合であるとしている（以下、「：」は音声境界を表す）。[3]

(12) a.［新空港：建設］に反対する。
b.［受験生：増加］に伴って……　（影山・柴谷 1989: 141）

一般に、助詞の省略は口語体や新聞の見出しなど、限られた文体のみにおいて可能であるのに対し、（12a,b）のような表現は通常の文体で容認されることから、影山・柴谷（1989）はこれらを特異なケースと見なし、統語的複合語と呼んでいる。一般的な語彙的複合語がアクセントの山を一つのみ形成するのに対し、（12a,b）の複合語は、各構成要素のアクセントが保持され、当該複合語の元となる名詞句アクセントとの平行性（＝13a）および意味の類似性（＝13b）が見られる（Shibatani & Kageyama 1988）ことから、音韻・意味的性質の両方が語彙的複合語と異なる（（13a）の「¯」はアクセント位置を示す）。

(13) a. じゅけんせいのぞうか→［じゅけんせい：ぞうか］（影山・柴谷 1989: 149 を一部改変）
b. 受験生の増加に伴って……　（影山・柴谷 1989: 141）

Shibatani & Kageyama（1988）、影山・柴谷（1989）は、統語的複合語が形態的緊密性や語種制約など、語の特質も見せることを根拠に、これらが助詞の省略により生じた句ではないと主張している。一方、Horiuchi（2005）は、語彙的性質の根拠が統語的性質に比べて弱い（森田 2015）ことから、統語的複合語を助詞の省略からなる句であるという立場をとっている。Horiuchi（2005）の立場を採用した場合には、通常ノの省略は容認されないことから（例：中国の人口、*［中国：人口］（影山・柴谷 1989: 143））、なぜ、（11a,b）の統語的複合語ではノの合法的な省略が容認されるのかが説明されなければならない。

この点について、Horiuchi は、（12a,b）の VN が V・N 両方の性質を持つ混合範疇（mixed category）

[2]文末の「です」および謙譲語の「いたす」を用いた文章語における「VN スル」の格省略が文の容認度を下げるという指摘については、Terada（1990: 144）を参照されたい。

[3]「統語的複合語」は影山・柴谷（1989）で用いられている用語である。Shibatani & Kageyama (1988) では「統語論の後に作られる複合語」（Post-Syntactic Compounds）と呼ばれ、両論文で音韻部門で形成される複合語であると見なされている。

であることから、その補部名詞句に与えられる格は（8a-c）のいずれにも該当せず、その結果、助詞の省略が合法的に行われると主張している。また、ヲやガの省略に関しても同様の事が観察される。

(14) a.［アメリカ：訪問］の折……（cf. アメリカを訪問の折……）
b.［実験：終了］後……（cf. 実験が終了後……）　（Shibatani & Kageyama 1988: 457 を改変）

統語的複合語の形成を助詞の省略と見なした場合、当該複合語が合法的な助詞省略が成立する唯一の環境となるため、本研究における「VN スル」の助詞省略とは異なるタイプの省略現象と分析される。
また、これらの統語的複合語は「スル」と共起することはできない。

(15) a. 法律の改正をする。　a'. *［法律：改正］をする。（cf.［法律：改正］の際……）
b. 方言の調査を実施する。b' *［方言：調査］をする。（cf.［方言：調査］の際……）
（影山 1993: 249 を改変）

この事実に対し、影山（1993: 250）は、統語的複合語は陳述性が低く、「特定の出来事を事実（あるいは頭の中で確定されたもの）」として捉える名詞的概念を表すため、「スル」と共起するなど、陳述性が高い文脈では容認不可能となり、一方で陳述性の低い文脈では容認可能であると主張している。

(16) a. *［浅間山：爆発］が一週間も続いた。
b.［浅間山：爆発］のニュースが報道された。（影山 1993: 250）

従って、例えば（7a）の「VN をスル」構造からヲを非合法的に省略した形としての「*法律改正する」や、（7b）から、ノを合法的に省略し、ヲを非合法的に省略した「*法律改正する」はいずれの文体としても容認されないことになる。

4.2. VN スルとかき混ぜ

本節では、VN スル構文にかき混ぜ（scrambling）を適用した際の振る舞いについて考察する。Saito（1983: 252）では、動詞に隣接している名詞句のヲ格は省略が可能である（例：「何（を）買ったの？」）一方、主語名詞句のガ格は省略が不可能である（例：「誰 *（が）来たの？」）ことを指摘し、ヲ格省略とガ格省略が適用された文の容認度の差を明らかにしている。口語体で主題標識であるハの省略が可能であることは、久野（1973）の指摘する通りであるが（例：「太郎（は）来たの？」）、Saito （1983）はこの点に鑑み、ハとの共起が成立しない先述の疑問文の比較（例：「* 何は買ったの？」／「*誰は来たの？」）を通して、格省略と動詞の隣接性との関連性を指摘している。
さらに、Saito（1983）は、かき混ぜの適用によりヲ格名詞句と動詞との隣接性が保たれない場合には、ヲ格省略が容認されないことを（17a,b）の対比から指摘している。

(17) a. ジョンが誰殴ったの？
b. *誰ジョンが殴ったの？　（Saito 1983: 254）

しかし、本研究の考察対象である（18a）のような口語体の「VN スル」構文にかき混ぜを適用した（18b）は、VN と動詞「スル」が隣接していないにも関わらず、口語体としては容認可能である。[4]

(18) a. 花子が（大学で）音楽の勉強するよ。
b. 音楽の勉強、花子が（大学で）するよ。

[4]（18a,b）の言語事実は宮本陽一氏の指摘による。

同じ格助詞省略という現象であるにも関わらず、（17b）と（18b）では、なぜ差が生じるのであろうか。この点について、Masunaga（1988）は、動詞との隣接性条件が満たされていても格省略が容認されない（19a）の例や、逆に隣接していなくてもガ格の省略が可能な（20b）の例などを根拠に、文末における終助詞の存在が格省略を容易にさせることを指摘している。[5]

(19) a. 花子｛を／???ø｝呼んだ。
　　b. 花子｛を／ø｝呼んだ｛よ／ぞ｝。
(20) a. 女の子｛が／???ø｝来た。
　　b. 女の子｛が／ø｝来た｛よ／ぞ｝。　　Masunaga（1988: 148 より一部改変）

Masunaga（1988）は、格助詞には焦点化が深く関わっていることを提案している。その上で Masunaga は、終助詞によって動詞が焦点となる結果、名詞句が脱強調化（de-emphasize）され、脱強調化された名詞句、つまり焦点化の適用を受けていない名詞句の格助詞が省略できるとしている。Masunaga の指摘が正しいとすると、（18b）における格省略は、終助詞「よ」があることから、動詞との隣接性が守られていなくても容認されることになる（cf.「???音楽の勉強、花子が（大学で）する」）。[6]

一方、（7a）の構造で「音楽を勉強する」からヲ格を省略すると、「音楽勉強する｛よ／ぞ｝」となり、これは VN スル構文以外でも見られる、口語体における通常のヲ格省略と同じ現象と考えられる。

5. 結論と今後の課題

本研究ではヲ格の所在を K に仮定し、また、VN の名詞化（Kamiya 2005）の役割を K が担うことを提案した。Saito（2018）は、φ一致のない日本語では、「弱い」主要部である K が「反ラベル機能」を有するため、ラベル付与の｛XP, YP｝問題（Chomsky 2013, 2015）を回避できるとしている。本研究は、K の名詞化辞（nominalizer）としての形態・統語・談話的役割を考察した。格の省略に文体が関わっていることから、K の談話上における役割の解明が今後の課題としてあげられる。

関連する問題として、4.2 節で見た、格省略における終助詞の役割と「対話省略」（矢田部 1996）との関連性があげられる。例えば、（21a）の回答として（21b）は容認度が低いが、（21c）は問題がない。

(21) a. 花子は大学で何｛を／の｝勉強するの？
　　b.??（花子は）大学で音楽の勉強する。
　　c.（花子は）大学で音楽の勉強するよ。

しかし、(22a) の回答として、終助詞の有無に関わらず (22b, c) における格省略は容認されることから、（21b）と（22b）とが対比することが分かる。

(22) a. 大学で何｛を／の｝勉強するの？
　　b. 音楽の勉強する。
　　c. 音楽の勉強するよ。

矢田部（1996）は格省略の中には、対話省略という現象があり（例：「あ、あれは僕__、飲みました」／??「あ、あれは、太郎__、飲みました」（矢田部 1996 :237））、このタイプの省略は、一人称・二人称主語の格省略に限るという人称制限が働くという提案をしている。（21b）と（22b）では VN の格省略であり、主語の格省略ではないものの、文の主語が一人称である場合（＝22b）に VN の格省略は終助詞が無くても容認され易いが、三人称の場合にはされ難い（21b）と言う可能性があるのかもしれない。終助詞が対話に関するマーカーであるとすると、文を超える談話レベルでの制約が働いている可能性がある。

[5] 終助詞と格省略の関連性についての近年の分析としては、遠藤・前田（2020）、福田・古川（2023）を参照されたい。
[6] しかし、「???勉強、花子が大学でするよ」は容認度が低いことから、ここでは「勉強」が焦点化される解釈が強制的に働くことが示唆される。

また、矢田部の例文である「あ、あれは僕__、飲みました」には文末に「ます」があり、この「ます」が（19b)、(20b）の終助詞の役割を担っている可能性がある。その場合は、(10a,b）の再検証が求められ、Miyagawa（2017, 2022）が提唱する「ます」の談話上の働き、φ 素性一致との関連性も考慮する必要がある。

参照文献

Chomsky, N. (2013) Problems of projection. *Lingua* 130: 33–49.

Chomsky, N. (2015) Problems of projection. Extensions. In E. Di Domenico, C. Hamann & S. Matteini (eds.), *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, 3–16. Amsterdam: John Benjamins Publishing co.

遠藤喜雄・前田雅子（2020)『カートグラフィー』東京：開拓社.

Fukuda, M. (1993) Head government and case marker drop in Japanese. *Linguistic Inquiry* 24: 168-172.

福田稔・古川武史（2023)「日本語の終助詞と格助詞脱落について」『宮崎公立大学人文学部紀要』30: 65–80.

Harada, S. (1973) Counter equi NP deletion. *Annual Bulletin* 7: 113–147. The Research Institute of Logopedics and Phoniatrics, University of Tokyo.

長谷川拓也（2021)「分散形態論と V–N タイプ二字漢語動名詞」『日本言語学会第 163 回大会予稿集』234–240.

長谷川拓也・大関洋平（2020)「分散形態論と日本語の動詞由来複合語」『日本言語学会第 161 回大会予稿集』299–305.

Horiuchi, H. (2005) Post-syntactic compounding as case particle omission in mixed categories. *Chicago Linguistics Society* (*CLS)* 41: 135–48.

影山太郎（1980)『日英比較　語彙の構造』東京：松柏社.

影山太郎（1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kageyama, T. (2009) Isolate: Japanese. In R. Lieber & P. Štekauer (eds.), *The Oxford Handbook of Compounding*, 512–526. Oxford: Oxford University Press.

影山太郎・柴谷方良（1989）「モジュール文法の語形成論—「の」名詞句からの複合語形成—」『日本語学の新展開』久野暲・柴谷方良（編）139–166. 東京：くろしお出版.

Kamiya, M. (2005) Nominalization and case marking in Japanese. *Chicago Linguistics Society* (*CLS)* 41: 207–222.

岸本秀樹・于一楽（2019)「『(漢語／和語）一字形態素-スル』の語形成と形態構造」岸本秀樹・影山太郎（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』55–80. 東京：くろしお出版.

久野暲（1973)『日本文法研究』東京：大修館書店.

Li, Y. 1990. X^0-binding and verb incorporation. *Linguistic Inquiry* 21: 399–426.

Masunaga, K. (1988) Case deletion and discourse context. In W. Poser (ed.), *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, 145-156. Stanford, CA: CSLI.

Miyagawa, S. (1987) Lexical categories in Japanese. *Lingua* 73: 29–51.

Miyagawa, S. (1989) Light verbs and the ergative hypothesis. *Linguistic Inquiry* 20: 659-668.

Miyagawa, S. (2017) *Agreement Beyond Phi*. Cambridge, MA: MIT Press.

Miyagawa, S. (2022) *Syntax in the Treetops*. Cambridge, MA: MIT Press.

森田順也（2015)「Postsyntactic Compound—先行分析とその問題点」『金城学院大学論集』人文科学編 11:101–111.

Saito, M. (1983) Case and government in Japanese. *Proceedings of West Coast Conference of Formal Linguistics (WCCFL)* 2: 247–259.

Saito, M. (2018) Kase as a weak head. In L. Kalin, I. Paul & J. Vander Klok (eds.), *Heading in the Right Direction: Linguistic Treats for Lisa Travis* (*McGill Working Papers in Linguistics* 25), 382–391.

Saito, M. & H. Hoshi. (2000) Japanese light verb construction. In R. Martin, D. Michaels & J. Uriagereka (eds.), *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 261–295. Cambridge, MA: The MIT Press.

Sells, P. (1988) More on light verbs and θ-marking. Ms., Stanford University.

Shibatani, M. & T. Kageyama. (1988) Word formation in a modular theory of grammar: Postsyntactic compounds in Japanese. *Language* 64: 451–484.

Sugimura, M. (2012) Root vs. *n*: a study of Japanese light verb construction and its implications for nominal architecture. *Proceedings of ConSOLE* 17, 289–298.

Terada, M. (1990) *Incorporation and Argument Structure in Japanese*. Doctoral dissertation, Amherst, MA: University of Massachusetts.

Travis, L. & G. Lamontagne. (1992) The Case filter and the licensing of empty K. *Canadian Journal of Linguistics* 37: 157–174.

矢田部修一（1996)「現代日本語における 3 種類の主格助詞省略現象」郡司隆男（編）『制約に基づく日本語の構造の研究: 国際日本文化研究センター共同研究報告』223–239. 国際日本文化研究センター.